**菊谷　栄 （きくや・さかえ）**

**１、プロフィール**

劇作家。エノケン（榎本健一）の新カジノ、ついでピエル・ブリアント（Ｐ・Ｂ）に参加、レビュー脚本、まげもの、与太者および六大学シリーズで大当たりした。

＜生没＞

1902（明治35）年11月26日 ～ 1937（昭和12）年11月９日

＜代表作＞

戯曲「パリの与太者」「民謡六大学」 「最後の伝令」

＜青森との関わり＞

東津軽郡油川村大浜（現青森市）生まれ。

**２、作家解説**

本名は栄蔵。明治42年油川尋常小学校入学。大正４年青森中学校入学。大正10年上京、川端画塾に通いながら日本大学文学科（芸術学）入学。同大学在学中、多くの戯曲を習作、各種の演劇を見る。卒論は「歌舞伎と動物」。この頃二科会、帝展に入選せず懐疑的となる。昭和４年淡谷、竹内らの青森劇研究会の舞台を手伝う。在京の学生らの秋田雨雀を中心とした研究会「日曜会」に参加。翌年エノケンの新カジノフォリーに舞台装置で参加、その年カジノの解散後榎本健一と共にプペ・ダンサントに参加。同文芸部にサトウハチロー、菊田一夫がいた。

昭和６年郷里の文芸誌「座標」に随筆「朗らかなインチキ味」を発表。11月プペ・ダンサント解散後、ピエール・ブリリアント(Ｐ･Ｂ)がオペラ館で旗揚げ、それに参加。

従来、検閲対策として劇団員佐藤文雄の名を借りていたが、初めて菊谷栄の筆名を使い、専属披露公演で「リオリタ」を創作、評判をとった。

９年Ｐ・Ｂが新宿に進出､「坂本龍馬」の他「パリの与太者」「ピカデリーの与太者」など与太者シリーズを発表。10年Ｐ・Ｂが大阪に進出､さらに「ヤンキー若様」等の作品を次々に発表､「民謡六大学」が大ヒットし､１カ月半の長期興行となった。

昭和13年五所川原の「西北新報」に「エノケンと僕」を連載。脚本「南は大空」・「弥次喜多、奥羽街道」などを上演、また、大学シリーズ「流行歌六大学」が大好評を博する。昭和12年「水戸黄門漫遊記」「アルセーヌ・ルパン」「ジャズ六大学」を発表したが、７月黄疸で倒れ休養。９月兵役召集を受け、P・B座員が品川で見送る。

11月９日中国南和で戦闘中に撃たれ戦死。12月雑誌「新喜劇」が追悼号を刊行。

昭和44年帝国劇場で、菊田一夫作「浅草交響楽」に、栄の作品「最後の伝令」が劇中劇の形で挿入される。

**３、資料紹介**

〇「麒麟のゐる風景」

原稿

1933（昭和８）年10月23日

255mm×180mm（400字詰原稿用紙袋綴）

タイトルの上に「小喜劇」と冠し、サブタイトルとして､「又はチョウタラウとたか子」を付す｡１幕もので､上野動物園を舞台とし､麒麟のいる金網の前で繰り広げられる人間喜劇を描く。